

永遠の生ではなく無限の死を生きること

真崎守「夢のやどり」における〈死〉と〈同一性〉について

● 神 田 浩 一

1 かつて真崎守という漫画家がいた

70年代初めに青年を中心にカルト的な人気を誇った漫画家、真崎守（1941-）は岐阜県の高校を卒業後、様々な職業を転々としながら1960年に貸本漫画家としてデビューをした¹。しかし漫画家として生きていくことに自信を持たずに1963年に虫プロダクションに就職する。そこでアニメ『ジャングル大帝』や『佐武と市捕物控』などの制作演出に関わりつつ、同時に同社が発行していた雑誌『COM』（1967-1973）を中心に峠あかねという名で漫画批評を展開する。漫画家としては、若者の叙情を観念的だがスタイリッシュに描いた『はみ出し野郎の子守歌』（1970）、『週刊少年マガジン』という商業誌に連載しながら実験的な手法を果敢に展開した『キバの紋章』（1972）、斉藤次郎の原作で学生運動をテーマにした『共犯幻想』（1974）などが代表作である。漫画以外にも、アニメの演出、監督をしたり、絵本を描いたり、多角的な活動を行っている。

この小論で取り上げるのは、圧倒的な影響力を持ち熱狂的なファンがいた²70年代の代表作ではなく、漫画を発表する機会が減り³、フィクションとしてはほぼ最後になる55ページほどの中編「夢のやどり」（1984）である。なぜ単行本に収録されておらず知る人が少ない作品を取り上げるのか？ 「夢のやどり」には、真崎守の主要テーマである現実の多層性、現実と幻の境界の不確かさが、生を激しく燃え上がらせる死の問題というもう1つの主要テーマと密接に絡み合って展開されており、さらに『キバの紋章』などに典型的に見られる大胆で実験的なコマ割りから離れ⁴、成熟した語り口で肅々と展開される物語は真崎守という漫画家の1つの到達点を表しているからである。

2 あらすじ 生死とは花のありかの導べにて すなわち夢のやどりの顧愛なり

漫画雑誌『SFマンガ競作大全集』に2回にわけて発表された「夢のやどり」⁵は、単行本に未収録の知名度の低い作品であるので、あらすじを紹介する必要があるだろう。

おそらくは核戦争で崩壊した地球から離れた月のステーションでは、クローニングによって古

1 「雨の白い平行線」貸本『街 39集』所収、セントラル文庫、1960年。

2 真崎守の『キバの紋章』を取り上げた「BSマンガ夜話」の中で、映画監督の大森一樹は自分の最初の作品のポスターに真崎守のマンガの1コマを使ったエピソードとともに彼への熱い思いを吐露し、また漫画家、漫画評論家の夏目房之介は真崎守にインタビューに行くときに震えたと語っている。（2001年10月31日放送 NHKBS1 「BSマンガ夜話」）

3 「夢のやどり」以降、80年代に発表された漫画作品は「夢のやどり」の前史とでも言える「キスしてくんなきゃ めざめない！」（1986）と漫画というよりも挿絵の多い文章という「富士幻視行」（1986）にとどまり、90年代以降は『老子』（1993）と『荘子』（1993）だけとなる。

4 『キバの紋章』は商業誌『少年マガジン』に連載されていたが、主人公狂児が1ヶ月誰とも会わずに完全な暗闇で生活する「闇縛り」のシーンでは見開き2ページが完全に黒に塗られて、さらにそれが次のページも続き、さらにその次の見開きの下に「ガチャッ」と小さなコマに文字が入るというような大胆な手法が用いられている。

い肉体を脱ぎ捨てることで、〈永遠の生〉が実現されていた。主人公チャンスは不思議な懐かしさを感じる古老アミに久しぶりに会いに行くが、そこで何者かの襲撃を受ける。アミを狙っているらしい。アミの高性能なコンピューターテクノロイド G によって襲撃者が撃退された後で、突然、アミがチャンスに銃の引き金を引き、チャンスはアミによって殺害される。チャンスは死を予感し意識を失うが、失われたはずの意識は徐々に回復し、どこからか聞こえてくる声に再生を希望するかどうか尋ねられる。気がつくと目の前にシルビアと名乗る女性がいてチャンスに彼が再生したと告げる。チャンスは再生のトレーニングを受ける。恋人レイが尋ねてきて、非合法的なクローンであるシャドーの存在とそれを抹殺するシャドー・ハンターの話が聞かされる。チャンスは自分がシャドー・ハンターであり、シャドーであるアミを抹殺しようと訪ねたときに先手を打たれて彼に殺されたことを思い出す。そこでアミの家に乗り込みアミを銃撃する。しかし死んだはずのアミは頭部が切断されたままの状態でチャンスの思い込みの間違いを正し、チャンスはもう一度すべてを思い出そうとする。そこに現れたシルビアは、実は彼はずっとトレーニングルームにいて、レイが来たこと、アミを撃ったことはすべて彼の意識に生じた幻であると告げる。そしてアミへの復讐よりも再生後の生をどのように過ごすのかを考えた方が良い、例えば私と素敵な時間を過ごさないかと忠告する。

再生トレーニングが終わったチャンスを恋人レイが待っている。彼女は自分がシャドー・ハンターであり、他ならならぬチャンスこそがアミのシャドーであり、シャドー・ハンターに追われていること、彼女はシャドー・ハンターの任務としてはチャンスを殺害しなければならないが、彼への愛からそれができないでいることを告げる。折しも別なシャドー・ハンターが2人を殺害しに来る。

シャドー・ハンターを撃退した後で、アミのところに行くと、アミはすでにコンピューターに意識を移行させて肉体としては死んでおり、その遺体を当局に届けるようにチャンスとレイに提案する。チャンスではなくアミがシャドーであるとするれば、チャンスは以降シャドー・ハンターに追われることもないし、レイも任務を遂行しない反逆者（アウトター）でなくなるからだ。アミの自己犠牲によってすべてが丸く収まるかと思えたが、シャドーであろうとなかろうと自分は自分であり、そもそもシャドーを抹殺すること自体が間違いなのだといい、チャンスはアミの申し出を拒否する。レイもまたチャンスの意見に賛同する。2人はアミの家に来た3人のシャドー・ハンターと戦う。

物語はチャンスとレイのように〈永遠の生〉を拒否する者たちの現れが後に「原人シンドローム」と呼ばれるようになったと語られるところで終わる。

3 〈永遠の生〉へ希求と欺瞞

〈永遠の生〉と〈死〉の2つの選択肢を前にして、チャンスとレイのように〈死〉を選ぼうとする酔狂な者はどれだけ存在するだろうか？

どのような富貴のもとに生まれようとも、たとえすべての望みがかなうような状況で生きていても、人間は等しく死を免れえない。その回避不可能性のためか、あるいは生物に組み込まれている自己保存の本能のためか、古来ずっと人間は〈永遠の生〉を希求してきた。例えば栄華を誇

5 真崎守、「永遠の生 無限の死 夢のやどり」前編、『SF 漫画競作大全集23』所収、東京三世社、1984年、1月号、26-50ページ。真崎守、「永遠の生 無限の死 夢のやどり」後編、『SF 漫画競作大全集24』所収、東京三世社、1984年、3月号、159-190ページ。

った秦の始皇帝は不老不死を求め徐福を蓬萊に派遣した。しかし現在のところ人間の個体が死を免れるすべは知られていない。そのために人間は別な方法で〈永遠の生〉を実現しようとした。

フランスの文化人類学者フランソワーズ・エリチエによると、自分たちの記憶を保持し、必要な崇拝を死後行ってくれる子孫を残すこと、これこそが多くの社会で最も重要な願望かつ義務である⁶。生物学的なものであれ、社会的なものであれ、子孫を残すこと、この願望、義務こそは個体としての〈永遠の生〉が不可能である人が考えた代替案としての〈永遠の生〉であろう。そこでは個体は滅びても、ある種の記憶の接ぎ木によって〈永遠の生〉が想定され希求されている。

「夢のやどり」で実現されている〈永遠の生〉は科学の進歩によって可能になった生物学的な個体の延命と、多くの人類社会が願望として抱いた記憶の接ぎ木の折衷である。クローンに記憶を移植して、物語内では明示されていないが、死すべき古い肉体は破棄されることで、意識の上での〈永遠の生〉が実現されている。しかしこの〈生〉は果たして本当に〈永遠〉なのだろうか？ 〈私〉は果たしてつねに〈私〉であり続けるだろうか？ そこに何かしらの欺瞞はないだろうか？

永井均は〈私〉が〈私〉であることの存立基盤について思考を巡らせた哲学者であるが、〈私〉が〈私〉であるための条件についてSF的とても形容可能な興味深い思考実験を行っている⁷。〈私〉から様々なものを取り除いたり付け足したりして、それが〈私〉であり続けるか考えていく。例えば、〈私〉から記憶を消去すればそれは〈私〉か？ 〈私〉に他人の記憶を移植すればそれは〈私〉か？ あるいは別の人間と意識を取り替えたら意識と肉体のどちらが〈私〉か？ 〈私〉を細胞の1つ1つからすべての記憶にいたるまでにコピーしたらそれは〈私〉か？ オリジナルとコピーには違いがあると言えるのか？

「夢のやどり」の物語世界では、〈私〉の同一性は、破損した、あるいは破棄される、オリジナルよりも物質的な意味で良質なコピーが優先されているようなので、肉体の同一性より記憶の同一性が重視されている。ただし記憶は誤る、あるいは改竄される可能性もある。

ところで真崎守は現実の重層性、現実と幻の境界の曖昧さを常に問題としてきた漫画家である。例えば、代表作『キバの紋章』では、真っ暗闇の部屋で1ヶ月の間たった1人で過ごす「闇縛り」という試練を経た後に、主人公の狂児が直面するのは、彼が確かに経験したはずの出来事が関係者たちに完全に否認されるという事態である。また『流れ者の系譜』の記憶喪失の主人公は自殺未遂の少女を救い、女中であるその少女を虐待している家の主人を懲らしめ、その家の息子をいじめから救うのだが、記憶が蘇ったときに、実は主人公は知らずに自分の実家に舞い戻っていて、彼が虐待と思っていたものは、実は主人公の失踪の後に生まれた倒錯的な家族の絆として解釈できるもので、そこに勝手に家を出て行った主人公の入り込む余地はなかったと思い知るというように、自分が真実だと思っていたことが二転三転する物語が多く作られている。実際に「夢のやどり」でもクローン再生のときにチャンスがアミをシャドーと思い彼を銃撃に行くところは、最

6 「きわめて広く普及しているこの種の考え方 [=子孫を残さないものは一人前の人間と見なされない] においては、子どもをもつ願望とは、とりもなおさず子孫が死者たちについての記憶を保持し、彼らのために必要な崇拝を行ってくれることを通して成就されるすぐれて社会的な願望なのである。先だつた者たちに対する義務、それはまた、やがて先祖になるであろう自分自身に対する義務でもある。」(フランソワーズ・エリチエ、井上たか子・石田久仁子監訳、神田浩一・横山安由美訳『差異の思考』、明石書店、2017年、293ページ)

7 様々な著作で論じているが、例えば、永井均、『転校生とブラック・ジャック』岩波書店2001年など。

初は〈現実〉として描かれており、あとで再生儀式の際に見た〈幻〉だと気づく仕掛けになっている。つまり記憶は同一性の担保としては危うい。そのために「夢のやどり」の世界では、同一性の担保をなす「記憶」のクローニングは慎重になされている。物語世界では再生儀式というものがありアシスタント的な存在とともにコピー前の記憶を新しいコピーの個体にクローニングしている。

ところで原理的にはコピーは複数可能であり、記憶の連続性が同一性の証であるなら、記憶を受け継いだコピーのどれもが〈私〉になりうる。まさしくこの正当性の不在のゆえに、オリジナルとされないコピーはシャドーとして忌み嫌われ抹殺されるのではないだろうか？ 〈私〉の存立基盤について考えていくと、記憶の連鎖によって成り立つ〈永遠の生〉には何か欺瞞的なものがあることがわかる。実際に物語の終焉部分で主人公チャンスはこう明言している。

「映像も現実もおこったことにかわりないなら、オリジナルでもシャドーでもプロントザウルスでも——ぼくがぼくであることにはかわりないはずだろ？ シャドーを違法としたのは誤りなんだ。」

破棄される肉体とともに、〈私〉はつねに死んでいるのではないかとも考えられる。

逆から考えてみよう。〈永遠の生〉というからくりによって〈私〉は果たして生きていると言えるのだろうか？ それに対して〈否〉と答えたのが、チャンスとレイである。

シャドー・ハンターのレイは、チャンスがシャドーであることを知るが、彼を抹殺することができず、かといって他のハンターがチャンス抹殺することにも耐えられずに煩悶していた。袋小路にいるレイを救い、シャドーであるチャンス救うために、アミは自分の意識をコンピューターに移し替え、オリジナルである自分の肉体をシャドーの遺体として当局に届けることを申し出る。しかしチャンスとレイはこのアミのお膳立てを拒否する。彼らはなにゆえに死を選び取るのか？

ところでチャンスとレイが本来なら自らに課さなくても良い〈死〉をあえて選び取る前に、すでにメカに意識を移したアミと行うのが、「サドー」である。茶道の極意が「一期一会」であることを想起すると、「死を自覚しなければ見えてこないものがある」というレイの言葉は、誰も代わりとなって死ぬことはできないという〈死の絶対的な非交換性〉とともに、死の持つもう1つの性格、〈死の絶対的な不可逆性〉を嘯みしめ、そこから逆算しなければ、この「一期一会」を〈真理〉として受け止められないということだろう。死を代償にして得られるもの、それは再生不可能で滅びゆく肉体の叫びである。「夢のやどり」は次のチャンス独白で終わる。

「ぼくの耳に聞こえたのは ただ熱い血が 血管を 走る音だけだった。」

4 結論 それぞれの死の選択

社会通念とは違い、〈死〉は決して忌避すべきものではなく、滅びゆく肉体とともに〈生〉の充溢を確認するために欠かせないものである。そう考えると〈永遠の生〉とは〈永遠の死〉に他ならない。これこそ、「永遠の生 無限の死」というサブタイトルのついた「夢のやどり」という漫画作品の主要なメッセージだろう。確かに、「死への先駆」により本来的な生を取り戻すというハイデgger的な振る舞いは劇的であり英雄的な選択である。青春の熱いほとばしりを好んで描いてきた真崎守にふさわしい物語の結末である。しかし真崎守はただ死を媒介にした生の充溢という生き方だけを顕揚しているわけではない。

アミが選んだ死はチャンスとレイが選んだ死とは別な可能性を示唆している。チャンスとレイの行った死の選択が死の固有性と結びついた〈私〉の固有性に徹底的に固執するものであったの

に対して、アミの行った死の選択は二重の自己放棄に基づいている。まずはオリジナルとして〈永遠の生〉を享受する権利を放棄して、コピーであるチャンスが合法的に生き続けられ、その結果チャンスの恋人レイ（「夢のやどり」と多くの設定を共有する「キスしてくれなきゃ 目覚めない」によるとレイはかつてのアミの恋人でもある）をも救おうとする。次に〈個体〉の生の充溢の基盤となる肉体を脱ぎ捨て、メカと一体化することで、狭い意味での〈個体〉の同一性をも放棄する。そして徹底的に〈個体〉としての動物的な生の充溢にこだわるかつての自分の分身を植物的な静謐さで見守り続ける⁸。後期の真崎守の心境もまたこの古老アミのように自己放棄によってチャンスという名にふさわしい青春の充溢を祈りを込めて見守るものであったに違いない。

8 確かに青春のほとばしりを描いた真崎守の物語にはこの古老アミのように自己放棄によって青春の奔出を見守る存在もまた描かれることが多かった。例えば『キバの紋章』では主人公狂児の罪を代わりに引き受けて父親は死刑になるし、『エデンの戦士』（1977）では主人公タケルに生きていく上での様々な知恵を伝授したアンドロイドの「じさま」は自分の命を引き換えにタケルを大陸間地下連絡網にテレポートさせる。しかしそれらはあくまで主人公の引き立て役に過ぎなかった。それに対して「夢のやどり」では古老アミは物語内で重要な役割を果たし存在感を増している。